



コキア

121 編、123 編は端書きに **(都に上る歌)** とあります。この二つの詩編に共通な言葉は **目を上げて(1)** です。

「目を上げる」という慣用表現は日本語にはありません。ごく普通に、「うつむいていたり、うなだれていたりした状態から、顔を上げて、目に入って来るものに注目する」ということになるでしょう。それは、目を上げる前には頭を垂れていたということになります。

アブラハムが子孫を増やすという神の約束を信じ切れずに、イシュマエルを儲けたあとも、うなだれて天幕の入口に、ぼつねんと一人座っていた時、**目を上げて見ると、三人の人が彼に向かって立っていた。(創18:2)** 場面を思い起こします。

三人の人 は神の使いであり、アブラハムの妻サラの懐妊を予告したのです。

121 編の詩人は **目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。わたしの助けはどこから来るのか。(1)** と歌います。詩人は山々を超えて巡礼をしなければなりません。遥かに遠い道のりを思い描いたかもしれません。一方、日本は急峻な山々による島国ですから、日本人には山は身近な存在であり、同時に、厳しさも感じさせられるためでしょうか、山そのものを神格化する文化があります。

121 編の詩人は **わたしの助けは来る／天地を造られた主のもとから。(2)** と、自然を創造された **主** ご自身に助けを求めます。だからこそ山々は乗り越えていくべきものなのでしょう。

3 節から、詩人の求めに先輩の同行者、あるいは巡礼を送り出す人が応えるかのように賛歌が続きます。**どうか、主があなたを助けて／足がよろめかないようにし／まどろむことなく見守ってくださるように。(3)** と、旅路の無事が祈られます。夜、詩人がまどろみ、仮寝をしても、**主** はまどろむことはない。昼、太陽に照らされ、暑さに苦しむ時、夜、月明かりで、襲われる危険がある時も、**主** が覆って陰となり、安全を守られると約束します。**主がすべての災いを遠ざけて／あなたを見守り／あなたの魂を見守ってくださるように。あなたの出で立つのも帰るのも／主が見守ってくださるように。今も、そしてとこしえに。(7)** と願っています。旅立ちに相応しい賛歌です。

123 編の詩人も **目を上げて、わたしはあなたを仰ぎます(1)** と顔を上げて、**天にいます方** を見上げます。次の箇所は **仰ぐ** と言っているのに、比喻で表現されている状況は「伏し目がちながら注目する」様子ではないでしょうか。**僕が主人の手に目を注ぎ／はしためが女主人の手に目を注ぐように／わたしたちは、神に、わたしたちの主を目を注ぎ／憐れみを待ちます。(2)** が示され、驚きます。**主人の手 女主人の手** とは裁量を指すでしょう。僕たちは主人に仕え、命じられるままに働き、どんなに働いたとしても、報われるのは主人の裁量にかかっているのです。僕の処遇、思いをよく知っている詩人が歌った賛歌でしょう。**わたしたちを憐れんでください。主よ、わたしたちを憐れんでください。わたしたちはあまりにも恥に飽かされています。(3)** と、苦しい胸の内を吐露しています。このような悲しい思いを抱きながら、それゆえにこそ、救いを求めて、巡礼に加わった詩人の賛歌です。

「讃美歌 21」では 121 編は 155「山べに向いて」 <https://sanbika.blog.ss-blog.jp/2010-08-07> をあげています。詞:別所梅之助(1871-1945)、曲:イギリス人 C. H. Purday による讃美歌で、愛唱されています。

ジュネーブ詩編歌は 121 編は <https://www.youtube.com/watch?v=ioKxMuNVbEw&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=121> 123 編は <https://www.youtube.com/watch?v=DqtCus6aq64&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=123> です。